

不登校経験者の自己省察に関する研究(2)

松井 理納*・稲垣 応顕

Investigation the Self-reflection of Those Who Have Experienced School Non-attendance (School Refusal) (2)

Yoshino MATSUI and Masaaki INAGAKI

キーワード：不登校経験者，自己省察，質的研究

Keywords : experienced school non-attendance, self-reflection, qualitative investigation

1. はじめに

今日の不登校（登校拒否；School Refusal 以下，SR と略記）についての論文を最初に発表したのは，Jung, C. G であるとされている（稲村，1994）。彼は，SR の原因を性的コンプレックスに求めた。

今日の SR 研究は，この Jung, C. G の論を否定することで発展してきた。すなわち，Treyner, J. V (1929) が，学校に行かない子ども達に関する論文をまとめ，彼らを Morning Sickness また School Sickness と命名した。さらに，本格的な SR 研究が，Broarwin, I. T (1932) により行われた。彼は，従来怠学といわれていた子ども達の中に，神経症圏に入る者が多いことを指摘した。また，Johnson, M ら (1941) は，彼らに学校恐怖症 (School Pobia) の名称をつけ，その原因を母子分離不安に求めた。その後，Warren, W (1948) により，彼らは学校を恐れているのではなく登校を拒否しているとの見解が出され，登校拒否 (School Refusal) の名称が提唱された。ただし，その中において Hersov, L. A などは彼らを不登校 (Non Attendance at School) の名称で呼んでいた。

ところで，我が国において今日的な意味合いでの学校に行かない子ども達の問題が取り上げられたのは，1960年代初頭である。それまでも，学校に行かない子ども達は存在していた。彼らの多くは第二次世界大戦の敗戦による混乱と貧困の中で，保護者の『農業に学問は要らない』との考えにより，学校に行かせてもらえなかったのである（滝川，2005）。その後，経済状況が改善してもそれら学校に行かない（行けない）児童生徒の数は増加し続けた。文部省（現；文部科学省）は，1966年から SR（年間50日以上欠席）の調査を行はじめた。そして，1991年から年間30日以上欠席者を対象に調査を行っている。

一方，それら子供たちの心理的特徴の捉え方に関する

研究も多方面から行われている。例えば内田 (2004) は，発達段階の視点から小学校低学年における SR について“小1 プロブレム”（幼稚園・保育園といった比較的自由で枠の無い生活をしてきた子ども達が，小学校という時間枠で生活する事に適応できない問題）を指摘し，その根底に母子分離不安があると主張している。また，中学年以上では，“仲間関係”における劣等感が大きな要因として働くことが指摘されている（内田，2006）。さらに高学年では，その心性は中学生とほぼ同じであり，思春期の入り口に存在する子ども達にとっては，“誰と一緒にいるか”，“誰を信頼し，誰を味方だと思えるか”，“心を許して話し合える友達とは誰か”，などが重要な問題となる。すなわち，自分が心理的に一人ぼっちであるという感覚の有無が SR の要因として大きく影響する事が指摘されている（犬塚・稲垣，1994）。

次に中学生における発達課題として内田 (2004) は，“自己の存在感の感知”の問題を提唱している。これは，大人への移行期の入り口にいる彼らにとって，Elikson, E. H (1970) が述べるように「自分とは何者か，自分はどこからきてどこへ行くのか」といった問題が大きくなることを意味し，それが解らないために自分自身が大きく揺り動かされ掴みにくくなることを意味している。

ちなみに小阪 (2005) は，その心性の内容として，①生物学的移行による身体の変化，②社会心理的次元から見た友達関係 (Chum ship) 有無や移行，③心理力動的次元からの理解である“死と生 (性)”の現実化，を挙げている。また，青木 (1998) は，中学生段階での子ども達の特徴を“悩み・怒り・無愛想・諦めと希望”と捉え漠然とした不確かさを抱くがゆえに心理的に動けなくなると述べ，稲垣 (2004) は思春期・青年期特有の内向性と，それに伴う強度な自己否定感情と他者否定感情を発端とする“歪められた感情 (distorted emotion)”が大きく関わっていると述べている。

以上，SR の原因論やそれらの子ども達における心理

* 富山大学大学院教育学研究科

特性を概観してきた。そこで大切になるのは、そのようなSRの子ども達に対し、どのような支援（サポート）が有効に働くのかという事である。換言すれば、SRの子ども達自身が自分をどのように捉え、何があれば再登校できるようになるか、何を支援（サポート）として感じるかということである。

筆者らは、これまで不登校経験を有し、現在不登校サポートに携わっている青年たちに上述の内容を知るためのアンケートとインタビューを行い、そのうちのいくつかを報告してきた（松井・稲垣，2006a, b; 稲垣・松井，2007）。本稿は、その続編である。

2. 目的

SRを経験し、今日自らがSRサポーターとして活動するKさんに、自身の人生の振り返り①SRの原因、②SR当時における周囲への認識、③SR時代に求めていた支援（サポート）；もしくはどのようなサポートによりSRを克服したか、④現在SRサポートを行う上での意識、を質的に検討し今後のSRサポートに示唆を得ることを目的とする。

3. 方法

従来からの筆者らによる研究方法を踏襲し、アンケート調査およびインタビューを行った。すなわち、稲垣・松井（2007）によるアンケートへの回答を促し、その回答内容を掘り下げるためのインタビューを行った。

（1）対象

SR経験者であり、適応指導教室の指導員等を兼務しながら不登校サポート活動を行なっているKさん。プロフィールを表1で示した。

（2）場所

T大学の個別面談室。

（3）方法

Kさんに、不登校当手を回想するよう促し、以下の視点からアンケートに回答するよう求めた。さらに、それを踏まえてインタビューを行った。

（4）アンケートの内容

- ①「私のライフイベント」：時間系列に従い、自身のこれまでの歴史を振り返り、家族、対人関係等の項目別に記述するよう促す内容。
- ②「私の人生曲線」：過去から未来までの自分の人生を、そのライフイベントに沿って図示化する内容。
- ③「私へのお手紙」：“今、ここで”の自分からSR当時の自分に宛てた手紙（メッセージ）。

表1 Kさんのプロフィール

-
- ・氏名、年齢、職業：
Kさん（男性）、32歳、適応指導教室指導員、フリースクール講師等を兼務
 - ・家族構成：
父、母、姉、Kさん
 - ・身体的特徴：
足に障害を有している（3歳時に発覚）。現在、杖は使用していないが、歩き方はぎこちない
 - ・性格的特性：
穏やかで、人を批判することがほとんどない。ただし、周囲をニヒルな視線で捉え、少し距離を置いて関わろうとする傾向が窺われる。
 - ・SR後の経緯：
大学検定試験に合格し、法科大学へ進学する。在学中および卒業後に、海外留学をする。その後、3年間の状況は不明だが、2001年より適応指導教室指導員とフリースクール講師等を兼務し始める（28歳）。
-

*以上は、1回目の面談の際、Kさんから語られた内容による。

（5）手続き

筆者らが、事前にアポイントメントを取っておいたKさんと直接面談し、アンケートとインタビューを実施した。面談は、2回行った。その要点は、下記の通りである。

- ①相互に自己紹介を行う。
- ②研究の趣旨を伝えた上で、アンケート用紙を手渡し、1週間後までに回答してくれるよう促した。
- ③翌週の面談で、アンケートを回収した。なおその際、筆者らも同様のアンケートを回答し、持参した。インタビューでは、シェアリングを行いながら実施した。

3. 結果

本稿では、経験者Kさんの回答を「方法」で示した①～③の順にまとめて記していく。また、順次考察を加えていく。

本稿では、それぞれの結果を示しながら、インタビューにより答えられた内容を一緒にして記述していく。

（1）「私のライフイベント」について

「私のライフイベント」の結果を表2で示す。

Kさんは、小学校2年生で自分の足の障害を自覚し劣等感を持ったとのことである。そのきっかけとなったのが、運動会での全校リレーで他のチームに追い抜かれたことで、同じチームのメンバー（Kさんは、“仲間”という表現はしない）から「いろいろ」言われた事にあるという。その際、誰も味方をしてくれなかつ

表2 Kさんのライフイベント

年齢	本人			家族			学校・居場所等での対人関係・活動等			学業
	出来事	父	母	その他の出来事	友人	支援者 (相談者・教師等)	部活動	学業		
S48年 0歳	オイルショックの混乱に乗じて誕生	公務員	主婦	姉(3歳上)						
S49年 1歳										
S50年 2歳										
S51年 3歳	左股関節亜脱臼が発覚									
S52年 4歳	リハビリ開始									
S53年 5歳	S市立保育園入園							トランポリン教室通う		
S54年 6歳								水泳教室通う		
S55年 7歳	S市立M小学校入学							習字習う(6年まで)		
S56年 8歳	2年次 雲行き怪しい 全出席日数の半分は欠席	仕事を休んで遅くにつれていってくれた		学校との連絡役	友達はそれなりにいた				体育嫌い	
S57年 9歳	3年次 全く登校せず				仲良い友は同じクラス	総合教育センターに相談		そろばん3週間のみ	2けたのかけ算ができず	
S58年 10歳	4年次 個人的に週休4日制導入					担任は理解有り			宿題はしていた	
S59年 11歳	5年次 昨年と変わらず 自分が問題児と始めて自覚								頭はいいと思いきや	
S60年 12歳	6年次 ほとんど休まず									
S61年 13歳	S市立T中学校入学	応援してくれた	心配だったそう	よくわかんなかったそう	小1～高3までと同居	先生が目をつけてくれる		ソフトボール	頭はよかったはず	
S62年 14歳					小1～高3までと同居	心理判定員のカウンセリング		ソフトボール	よかったらしいなあ	
S63年 15歳	福祉関係でカウンセラーになることを決意				小1～高3までと同居	心理判定員のカウンセリング		ソフトボール	たいしたことなかった	
H1年 16歳	県立N高校入学				部活は楽しかった			管弦楽部	下から教える方が早い	
H2年 17歳	出席不足留年決定 新学年は3週間登校	あきらめモード	あきらめモード	一番怒っていた		総合教育センターに相談		管弦楽部		
H3年 18歳	大検受験のため名古屋へ			同居	毎日が想像不可能な友だつた				大検は取った	
H4年 19歳	遊び過ぎを姉に怒られ富士山に戻って予備校へ								偏差値29	
H5年 20歳	福祉心理系大学は全て落ち、K法科大学入学	とてあえず進学できたことを喜んで			自分を無理矢理引っ張りあげてく			E S C 軽音部	家庭教師のため勉強する	
H6年 21歳	初海外は散々									
H7年 22歳	全国居場所巡り								フリースクールに入りびたり	
H8年 23歳	「こどものための学校」作りを人生目標とする									
H9年 24歳	大学卒業後豪州へ									
H10年 25歳	帰国後多くの仲間と出会う									
H11年 26歳										
H12年 27歳										
H13年 28歳	C市通応指導教室指導員	公共機関にお世話になって安心して								
H14年 29歳										
H15年 30歳										
H16年 31歳										
H17年 32歳										

たことへの悔しさと、言い返せなかった自分への悔しさを今でも鮮明に覚えているとのことである。稲垣(2007a)は、いじめに関する考察の中で「やられた側は、決して忘れない」と述べている。Kさんの体験が、いじめといえるか否かについては、様々な考えができるであろう。しかしKさんにとっては、今でも忘れられない、嫌な思い出となっている。特記しておきたいこととして、Kさんは「自分が抜かれた事は事実であるから、それは言われても仕方が無い。ショックだったのは、その時自分の障害を現実のものとして実感したこと、誰一人として自分を解ってくれなかったこと」と述べている。これは、我々人間にとって支えてくれる他者の存在がいかに大切かを示している。その後(前述のネガティブイベント直後からのこと)、両親に身体不調をはじめあらゆる嘘について学校を休み始めた。両親がそれを不審に思い問いただされたからは、「いじめられているから、学校には行けない」と答えていたという。Kさんは、そのことについて「いじめられたと言えば、学校を休めた。両親には、悪い気もしたけれど、(学校には)行きたくなかった」と述べている。また、そのようなKさんに対して時々、父親が「仕事を休んで、遠くに連れて行ってくれた。悪いと思いつながら、嬉しかった。でも、自分は学校には行きたくなかった」と回想している。稲垣(2007b)は、ニートに関する見解として、彼らが職場に「行けない→行かない→行きたくない、のプロセスを踏んでいるのではないかと述べている。すなわち、最初は何らかのトラブルにより劣等感を感じ行けない状況が芽生え、行かないでいたらいって、何とか生活できてしまった。そこに、行かないという意思を伴った感情が育ち、そのうちに行きたくないとの気持ちが強まりその状態が長期化するのではないかとということである。筆者らは、Kさんにとっての学校への意識にも、同様な感覚や感情があったのではないかと推察している。

しかしその一方で、「家にいると、父親は心配しているのは解るけど、いろいろと言われた。母親は、黙っていた。どちらにしても、家族の中ではしんどかった」とも語った。小学校4年生から、T県立総合教育センターの教育相談部に週1回通室した。Kさんは、当時を振り返り「毎週火曜日にカウンセリングがあり、それを担当するH先生と会うのが楽しみだった。自分で、個人的に週休4日を決め込んでいたけれど、火曜日は欠かさず通っていた。自分自身、一番明るくいられた場所だったなあ」と回想した。

また、13歳の4月に地元の中学校に入学するものの、7月に足の障害と長期欠席のため養護学校に転校する。それについて、「養護学校は、良かった。そこでもいじめはあったけれど、自分は自分よりも障害の重い子の車イスの世話をしていた」、また「その他にも、先生から仕事を色々頼まれて、それが嬉しかった」と話

した。さらに、「自分は、役割をこなせる人なんだと思った」、「養護学校では、仲間同士の他にも病院関係などで、いろんな人との付き合いがあった。それで、自分の考えが広がったと思う」と語った。またその時期、Kさんは養護学校で心理判定員によるカウンセリングを継続して受けており、中学校3年生(15歳)で福祉関係のカウンセラーになりたいと決心する。

高等学校は、地元の普通高校に入学する。しかし、1年生の後半から「中学校の頃と同じ感じ・・・、息切れを起こしたのかなあ。でも、何か面白くないというか、違和感を感じて・・・出席が怪しくなった(笑)」とのことである。高校1年から2年に進級する時、出席日数の不足で留年が決定した。大検(大学入試検定)を受けるため、名古屋に行くが「勉強など、ほとんどせずに遊びほうけていた」とのことである。そして、「姉に怒られて実家に戻り、予備校に通うようになったんよ(笑)」と語った。そして、「大検をとってから、現在に至っている、かな」と話を締めくくった。

(2)「私の人生曲線」について

Kさんによる「私の人生曲線」を図1で示した。これを見ると、「(1)私のライフイベント」の内容と一致するかたちで、彼の心の揺れが読み取れる。まずはじめに、彼が自分の障害を意識した小学校2年生まで、人生曲線は(+)の領域にある。特に、小学校1年生の時期は楽しい生活を送っていたことが読み取れる。それは、彼が家庭環境に恵まれていたことにも影響されていると思われる。しかし、小学校2年生時の全校リレーでの出来事を境に、自分の障害を意識し劣等感を持つと人生曲線は一気に(-)領域まで急下降する。そして、それは小学校4年生で県立の総合教育センターに行くようになるまで続いている。逆説的にいえば、「(1)私のライフイベント」を媒介としたインタビューでKさんが語っているように、毎週火曜日にH先生と会うようになると、(+)方向へ転じていった。

中学校に入学した12歳において、Kさんの人生曲線は下降している。これは、入学した地元の中学校での生活が、彼にとって楽しくなかった現れであろう。しかし同年の7月、養護学校へ転校すると人生曲線は一気に(+)に移行する。ところが、普通高校に入学すると再び人生曲線は、下降する。Kさん自身が述べるように、将来の目標を持てたのはよいが息切れを起こした現れであろう。

これらのことから、彼にとって自分を否定せずに受け入れてくれる他者との交流が持てたと感じていたときに人生曲線は(+)を向き、それが感じられない時に(-)を向いていたことが明らかとなった。すなわち、SRの子ども達へのサポートとして、彼らを否定せず受け入れてくれる存在、また他者との温かな感情

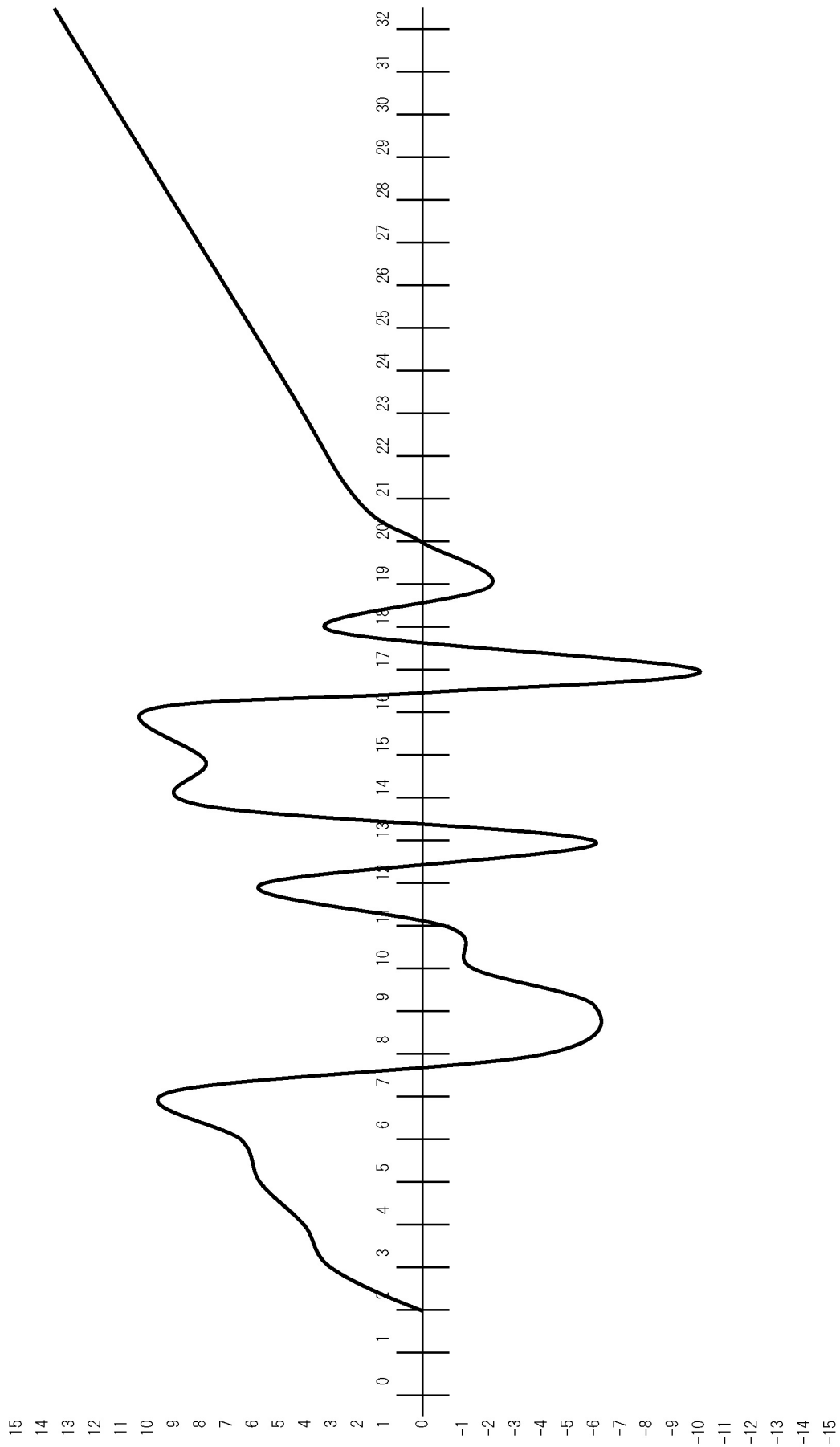


図1 Kさんの人生曲線

交流が重要であることが改めて示唆された。

彼はその後高校を中退し、約1年間に渡り彼自身が「人生の放浪」と表現する生活を送っている。しかし、大検に合格することで、人生曲線を上向きに変えている。19歳で、彼はわずかな下降を感じるものの、現在はこれからの自分の人生は(+)方向に伸びていくと感じている。筆者らは、このことについて、彼が楽天的だというよりもこれからの人生に対する決意や願いであるとも捉えている。

(3)「私へのお手紙」について

以下に、Kさんの「私へのお手紙」を表3で掲げる。

この16歳10ヶ月というのは、Kさんにとって出席日数が足りず留年か退学かの決定が求められていた時期である。この手紙を一読した筆者らの印象は、Kさんがニヒルな状態でいたこと、もしくは自分や学校を冷めた目で見ようとしていたこと、突っ張りながらもその反動としての自虐性を有していたとの印象を受けた。それは、Kさんの現在の感覚でもあるように思われた。彼は、インタビューの中でSR児童生徒の保護者、特に母親に対して「大学なんて、高校へ行かなくても行く方法はある。それよりも、家庭の風通しをよくすることが何よりも大事だということを伝えたい」と話していた。筆者らは、この言葉にKさんの満たされなかった家族への愛情欲求と学校を含む社会や周囲の人への意地の強さを感じている。

表3 Kさんの「私へのお手紙」

<16歳10ヶ月の自分へ>
もう気付いてるっしょ？
学校が自分に合わんことは。
自分の道見えないでしょ？学校以外は。
だったら、いつまでもウジウジしないで、
さっさと自分の足で動きなさい。

苦しんでるんだったら、目一杯苦しみなさい。
まだまだ足りないよお。
でもおかげさまで10代で、
たっぷし しんどい思いしたからね。
30代になったらラクよ。
なんでもアリだかんね。

苦しいフリはいいかげんにやめなさい。
見る人が見たらすぐにわかるんだから。
今の君は、見苦しいです。

どっちにしろ、まだしばらくは しんどいよ。
覚悟してね。
おかげで、すんげー楽しい30代が待ってるべ。

4. 全体的考察と今後の課題

SR研究が、Jung.Cから始まったとすれば、その歴史はすでに100年を超えていることになる。しかし、今日なお数多くのSR児童・生徒が存在する。

筆者らは、彼らへの有効な支援について示唆を得ることを目的に、SRを経験し現在は自らがSRサポーターとして活動するKさんを対象として、SRの原因・SR当時の意識・求めていたサポート・SRからの脱却に際し有効だった支援、などについてアンケート調査とインタビューを行った。

その結果、彼が①小学校2年生時に行われた全校りレー後に自分の障害を実感したこと、②周囲からの批判を浴びた事により、自分の足の障害を自覚し劣等感を有したことが明らかになった。さらに、その際誰1人として自分の味方になってくれなかった、換言すれば誰も自分の気持ちを解ってくれようとしなかったことで、孤独感と共に他者への信頼感や共通感覚を希薄にしていた事が示された。彼はそれについて、「何も言い返せない自分」に悔しさを感じていたという。これらのことから、我々の社会的適応に際して他者からの肯定的受け入れの態度が極めて重要な要素である事が示された。これは、逆説的に捉えれば「自分の言いたい事が言えない感情表出の困難性」の意識を強めた時に我々は社会適応を疎外される(稲垣, 1996)。

Kさんはその後、両親にも彼の言葉で言えば「あらゆる嘘について」学校に行く事を避けたという。すなわち、Kさんにとっては自己内部を含む全てが、増井(2002)の述べる「これまでの立派な自己像が崩れ<中略>全てが苦慮の世界」として一気に変質した事が窺われる。それ以降の彼は、「自分へ宛てたお手紙」で示されている通り Erikson, E. H (1968) のいう“否定的アイデンティティ(どうせ自分は・・・という意識で周囲との関係を覚めた目で捉え、割り切ろうとする歪んだ信念、自己卑下する自分を形成する自己意識)”にも似た自己意識を形成させ高校を中退する。筆者らは、そのようなSR児童生徒と関わる際に、藤原(1992)が指摘するように「SRという問題ではなく、SRという形で自分を表そうとしているその子」を受容・共感する事が大切であると考える。受容とは、相手を「先入観なしで、評価せず、こちらの価値観を押し付けず、ただひたすらに解ろうという気持ちで関わること」、共感とは「相手の心のフレームに沿って相手を解ろうとすること」(稲垣・犬塚, 2004)であろう。実際に、Kさんは小学生時代にSRだった時、毎週火曜日に県立総合教育センターでH先生と会えるのが楽しみだったという。そして、重要な事はその先生に特別何かをしてもらったという記憶は無いという。一方、Kさんは家にいることへの苦痛また窮屈さを語っていた。ちなみに、彼の人生曲線は、彼が温かな感情交流を取れた存在がいたときには上昇し、いなかったときには下降

している。これは、松井・稲垣(2006a)が不登校経験者へのアンケートとインタビューを行った報告の第1報において、彼らがSRをしていた当時、「両親は最も身近な分、サポートをしてもらうことに窮屈さを感じやすく<中略>SR経験者が当時サポートとして感じていたのは、何をしてもらうのではなく自分を否定しないで一緒にいてくれる存在だった」と述べることに一致する。すなわち、SR児童生徒への支援には利害関係を越えた、しかも第3者が望ましい事が示唆された。

今後の課題としてさらに、受容・共感とは具体的にどのような態度により示されるのか、換言すれば児童生徒をあるがままに受け入れるという言葉の具体的な意味について、検討を深める必要がある。また、SRサポートの実践を積み重ね、彼らの内面への理解を深めていく必要がある。

<文 献>

- (1) 青木省三(1998) 思春期外来からみえるもの。このころの科学。日本評論社。78。87-91
- (2) Boardwin, I. T (1932) A contribution to the study of truancy. Amer, Journal of Orthopsychiatry. Vol.2. 253
- (3) Elikson, E. H (1968) Youth, identity and crisis. New York: International Universities Press.
- (4) Elikson, E. H (1970) Autobiographic Notes on the Identity Crisis. Journal of American Academy of Arts and Sciences. Vol.99. 730-759
- (5) 藤原勝紀(1992)「登校拒否」に関するカウンセリング的理解。カウンセリング学科論集(九州大学教養部)。6。1-29
- (6) 稲垣応顕(1996) 非行少年への感情表出トレーニング適用に関する事例研究。上越教育大学障害児教育実践センター紀要。2。37-46
- (7) 稲垣応顕(2004) 第3部第3章自己意識の発達と人格形成—青年期の臨床的問題。／塚野州一編著 みるよみ生涯臨床心理学。北大路書房。123-150。
- (8) 稲垣応顕(2007a) 新しい実践を創造する学校カウンセリング入門。東洋館出版社。
- (9) 稲垣応顕(2007b) ニート①～働かない若者たち。日曜日の報道部から—KNB NEWSリアルタイムサンデーの1年—。北日本放送株式会社。19-24 (インタビュー記録)
- (10) 稲垣応顕・犬塚文雄(2004) わかりやすい生徒指導論改訂版。文化書房博文社。
- (11) 稲垣応顕・松井理納(2007) 不登校経験者の自己省察に関する研究(1)—自己の変容と周囲への意識に着目して—。スクールカウンセリング越佐。Vol. 10. 1-6
- (12) 稲村博(1994) 不登校の研究。信嚶社
- (13) 犬塚文雄・稲垣応顕(1994) 登校拒否生徒の心理特性に関する一考察—感情表出トレーニング適用事例を通して—。上越教育大学研究紀要。14(1)。67-80。
- (14) Johnson, M. Falstein, I. Szurek, S. A. et al. (1941) School phobia. Amer, Journal of Orthopsychiatry. Vol.2. 702.
- (15) 小坂和子(2005) 思春期の問題と不登校。臨床心理学。5(1)。金剛出版。
- (16) 増井武士(2002) 不登校児から見た世界—共に歩む人々のために—。有斐閣選書。
- (17) 松井理納(2006) 不登校経験者による不登校サポートのあり方についての一考察—経験者が行なうサポート活動の現状と課題—。平成17年度富山大学教育学部卒業論文。
- (18) 松井理納・稲垣応顕(2006a) 不登校サポーターの実際と意識に関する研究。富山大学人間発達科学研究実践総合センター教育実践研究。1。65-75
- (19) 松井理納・稲垣応顕(2006b) 日本教育カウンセリング学会第4回大会発表論文集。49-50
- (20) 内田利広(2004) ハートケア活動による不登校児童・生徒への支援システムの構築。平成15年度教育改革・改善プロジェクト報告書(京都教育大学)
- (21) 内田利広(2006) 第2章 不登校の現状とその理解。／忠井俊明・本間友巳 編著 不登校・ひきこもりと居場所。ミネルヴァ書房。26-50
- (22) 滝川一廣(2005) 不登校理解の基礎。臨床心理学。5(1)。金剛出版。15-21
- (23) Treynor, J. V (1929) School sickness. Journal of Iowa State Medical Society. Vol.19. 451-453
- (24) Warren, W, (1948) Acute neurotic breakdown in children with refusal to go to school. Arch. Dis Child. Vol.23. 266

(2007年8月31日受付)

(2007年10月26日受理)